早稲田大学大学院文学研究科紀要 第70輯（2025年3月）
Bulletin of the Graduate School of Letters, Arts and Sciences of Waseda University Vol.70 (Mar.2025)

土器の製作技法復元に関する一考察

――カンボジア、カンポット州の事例を中心に――

横　山　未　来

はじめに

古代の土器の製作技法は、一般的に遺物に残る痕跡の観察によって復元される。日本では土器の編年研究とともに、製作技術に関する研究が併せて行われてきた（千葉市加曽利貝塚博物館 1975、横山 1980、植野 1983、吉田 2003）。また、文字による記録が存在しない場合、伝統的な製陶技術や民族例を参照することで、古代の技術の同定が進展した（庄田 2007、2010）。しかし、製作に用いる工具や胎土などには地域的な特徴が大きく影響し、海外の遺物を扱う際には、日本の事例と似たような痕跡であったとしても日本での研究で想定されている道具や技法で製作しているとは限らない。本稿では古代カンボジアの土器の製作技法を復元するために、同地域に残る伝統的な土器づくり（民族事例）に着目し、出土遺物と民族事例の製作工程および技法の比較検討を行うことで得られた知見と今後の土器研究の指針について述べる。

1．東南アジアの土器づくりと民族考古学

東南アジアでは伝統的な土器づくりが今日まで継続しており、民族考古学の観点からの研究が積極的に行われてきた。民族考古学とは、考古学者自身が伝統社会で、人類学者や民族学者と同様の参与観察を行い、そこで得た社会－文化システムの動態や人の行動とその物質的結果に関する情報を援用して、考古学的資料を解釈することである（安斎 2004：18）。1990年頃よりプロセス考古学の中位理論としての民族学的研究が導入され、民族考古学や生態人類学からのアプローチが重視されたことにより、考古学者自らがフィールドに出て調査を行うようになった（長友 2020）。この時期にアメリカでプロセス考古学を学んだ小林正史や後藤明などが東南アジアにおける調査を開始した（小林 1996・2000、後藤 2001）。また、大西秀之のように日本にいながら文化人類学に関心をもち、フィリピンなどに調査に出た研究者もいる（大西 1998a、1998b、2007、2014）。2004年頃からは小林正史らがタイでの調査を本格的に開始したことにより、考古学者による組織的な民族調査が行われるようになり、より多くの考古学者が東南アジアの民族調査に携わるようになった。さらに、2010年代以降、考古資料としても出土する製作道具や遺構として確認できる窯、土器の使用に密接に関係する稲作などにも着目した研究が進み、研究の成果が発表

されるようになる（北野 2012、・平川・中園・川宿田 2016、徳澤・平野・北野・中村 2012、小林・外山・北野 2016など）。また、身体技法や工人の特定、土器の胎土分析に対して、考古資料に適用する理化学的方法や計測方法などを応用した研究も進められた（中園・平川・川宿田・太郎良・三辻 2012）。しかし、研究の進展状況は国や地域によって大きな差があり、カンボジアではまだまだ未着手の研究視点も存在する。

2．カンボジアにおける伝統的な土器づくりの調査史

カンボジアにおける伝統的な土器づくり村に関する記録はフランス植民地以前から見られる。フランス人パヴィーの旅行記には、コンポン・チュナン州のクレイやバン・チコールといった現在でも土器づくりを行っている村の名前が土器づくり村の名称として紹介されている（北川 2009）。また、コンポン・チュナン州のいくつかの村については19世紀から個別の報告が見られる（Anonymous 1899）。

続いて第二次世界大戦が終わり、カンボジアが独立した1950年代になると、カンボジア各地の詳細な報告が複数見られるようになった。ソーリス・ローランはカンポット州ドムナック・チャンボック村の土器づくりについて（Souyris Rolland 1950）、ムーラーは上記ドムナック・チャンボックおよびコンポン・チュナン州、コンポン・スプー州、プノンペン近郊について、図や写真とともに製作技術を中心に詳細な記述を残している[(1)]（Mourer 1968）。特にムーラーは、各地域の胎土、製作工程、製作工具、焼成、施文についての比較を行い、土器製作技術が３系統に分かれることを指摘した。コンポン・チュナン州は、胎土に混和剤として砂を混ぜること、また４段階の製作工程が存在することが特徴で、コンポン・スプー州とプノンペン近郊は完全に技術が同一であることからひとつの地域にまとめられること、そして窯を用いて焼成を行うカンポット州とそれぞれの地域の特徴をまとめている[(2)]（Mourer 1968）。さらに、清水はカンダール州プリック・チトロップ（Pric Chitrop）村について、製作工程のみならず生産体制や生産量・経済的な点にも触れた報告を行った（清水 1959・1963）。例えば、同村は93戸から成り、農業を主とするが、そのうちの10戸は土器づくりを専業としていること、技術者は20名あまりで全員女性であり年中製作すること、１日に大型壺であれば20個製作できること、焼成は５日に１度で約100個まとめて行うことなど生産体制を明らかにした。また、経済的側面として、販売は華僑を仲介して行われることが多く、直接販売よりも利益は少なくなること、１日の利益は20リエル（約140円）から60リエル（約420円）ほどであるとしている。また、デルベールはカンボジア中・南部の土器生産地を数十か所紹介した（Delvert 1994）。

しかし、1970年代からの政治的混乱期に入り、調査・研究は長らく行われなくなり、土器づくりが衰退してしまった地域も多数生じた。政治が比較的落ち着いてきた2000年頃から調査が再開され、古城泰・丸井雅子による論考や楢崎彰一らによる報告が発表され、残存する土器づくり村

が明らかになった。古城および丸井は、カンボジア内戦を乗り越えて存続するタケオ州チャンラク・ダイ（Chamlak Dai）村の土器づくりについて民族考古学的視点からアプローチした（Kojo・Marui 2000）。村の土器づくりの起源を1930年代のコンポン・スプー州ドム・ダエク（Dom Daek）村からの移住によるものであることを明らかにし、製作技法に加え、行商・価格・生業との関わりなどについても詳細に記述している。また、前述の通り、カンボジアでは長い政治的混乱期を経て、土器づくりが存続している村もあれば衰退してしまった地域もある。古城・丸井の論考では、過去の研究史を集成し、内戦以前と以後のカンボジア国内における土器製作村の変化に言及した点にも価値がある。また、楢崎は、アメリカの人類学者 Leedom Leffers Jr. と Allison Cort とともにカンボジアのみならず東南アジア各国の土器づくりを網羅的に観察・比較し、「製作工程」と「原形概念」によって 6 種に類型化した（楢崎ほか 2000）。加えて、各地域の特色の類似点や関係性は、地域の歴史・地理的条件や民族的背景などが大きく影響して成り立っており、流動的なものであると述べている。さらに、現地のカンボジア人研究者による調査報告の刊行も見られるようになった（Chap・Chhay 2008）。

そして近年に至るまで、中村・池田・徳澤・平野・黒沢ら日本人研究者やプノンペン王立芸術大学の学生たちによって調査が継続され、カンボジアの土器づくり村に関する情報や知識の蓄積が充実してきている（徳澤・平野 2010、池田 2011、大谷大学博物館 2012、黒澤 2016）。近年では国際化や急速な技術の進展に伴い、土器づくりを停止してしまう村も増えてきた。また、海外の NPO・NGO の支援などで新たな製陶技術が定着した地域もある。今後もこのような動きは加速していくだろう。そのようななかで、近年の土器づくりを停止した村を含む地域でのインタビュー調査や変化理由に関する質問などは、カンボジアの近現代社会を知るうえで今できる重要な調査のひとつであると考える。

以上がカンボジアにおける土器の調査史であるが、これまでのカンボジアの伝統的な土器づくりに関する研究では、社会・経済的側面に着目したアプローチが多く、製作工具や痕跡など資料自体の観察を通じた考古学的解釈に結びつく技術的側面に対する研究は十分であるとはいいがたい。また、民族調査はその実態の報告にとどまり、実際の考古遺物との比較・検討にまで行きついていない点に課題が残る。そのため、本稿では考古資料の技術的な解釈にどのように民族事例を援用していくかについて考え、その可能性を示したい。

3．カンポット州の土器づくり

カンポット（Kampot）州は、カンボジア最南端に位置する州で、東をタケオ州、北をコンポン・スプー州、西をシアヌークビル州と接し、南はベトナム国境およびタイランド湾に面する。カンポット州にはプレ・アンコール時代の洞窟寺院が点在し、古代より重要な拠点のひとつであった。既往調査では、バンテアイ・メアス（Banteay Meas）郡サムロン・ヨン（Samrong Yobg）区ロン・

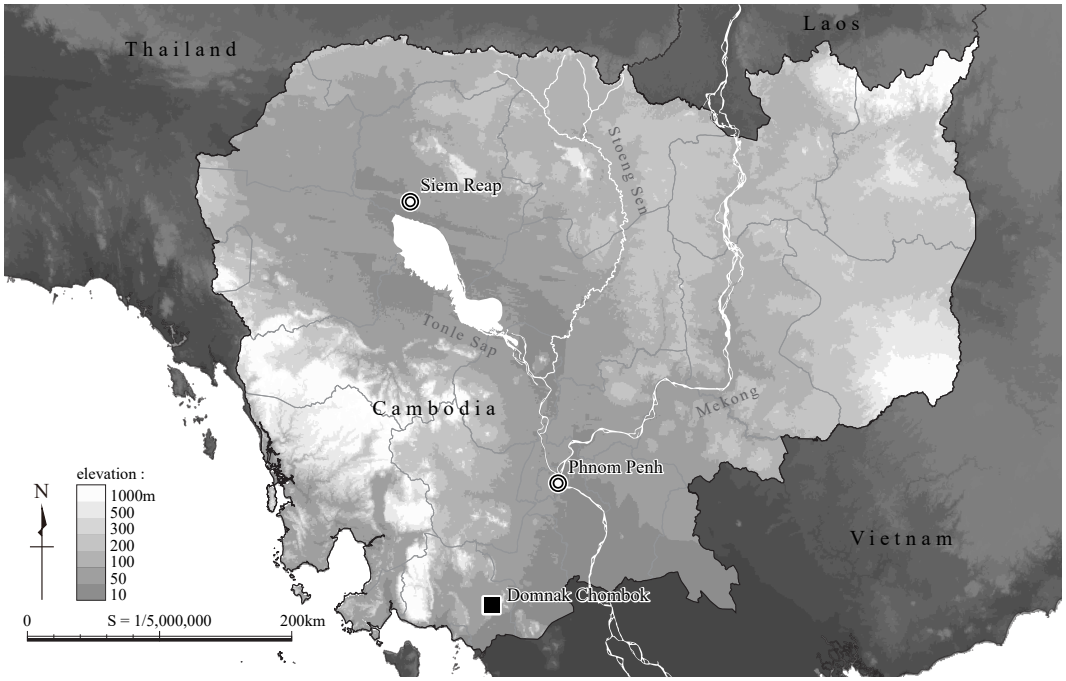


図１：ドムナック・チョンボック村の位置

ナ・チョンポリ（Rong Na Chong Prey）村、ニャック・ボック（Neak Bock）村やトトウン・トウガイ（To Toung Tou Gai）村についての報告が見られるが（中村ほか 2010、大阪大谷大学博物館 2012）、本稿では、同郡サムロン・ルー（Samrong Leu）区に位置するドムナック・チョンボック（Domnak Chombok/ដំណាក់ចំបក់）村における事例を扱う。筆者は2023年８月23日にカンボジアの研究者立ち合いのもと、現在も土器づくりを行っている工房を訪問し、インタビュー調査および写真・動画による記録を行った(3)。

カンポット州において製作される土器の主な器種はチュナン（Chhnang/ឆ្នាំង）とよばれる蓋つきの土鍋とチョンクラン（Chong Kram/ចង្ក្រាន）と呼ばれる焜炉である。調査にご協力いただいたサイ・ブンイー（Say Bunyi/សាយ ប៊ុនយ៉ី）氏（67歳）の工房でも上記の器種の製作を中心に行っていた。チュナンは考古遺跡などから出土する土器とも共通する形状を有する一方、同地域で一般的な七輪状のチョンクランは近代において発展した器種であり、先行研究ではベトナムからの注文によりカンポット州で比較的多く生産されることが指摘されている（中村ほか 2010）。よって、本稿ではチュナンに注目して検討を進めていきたい。

チュナンの製作工程は以下の通りである。

①　粘土の準備：山から採取した土を足踏み杵で砕き、ふるいにかけて生成。その後水を加えて

捏ね、粘土を作る。

② 円筒形「原形」の製作（1）：木の板の上で粘土を転がして円柱形の塊を作成し、板に離れ砂を撒いてから手のひらで叩き薄い長方形の粘土板を作る。それから粘土板を持ち上げて起こし、丸めて両端を接続して円筒を作成する。

【道具】手のひら【材料】粘土、砂

③ 円筒形「原形」の製作（2）：円筒を木の幹でできた作業台に据えたあと、内面に手をいれて支え、円筒の側面と上面を椰子の茎で製作した叩き板で叩いて整える。

【道具】椰子の茎の叩き板〔外面〕、手〔内面〕

④ 口縁部の作出：円筒の上からつまむように指をあて、一周指を走らせる。その後、円筒の上面に水で湿らせた葉をあて、指で押さえながら口縁に沿ってなでる。

【道具】指〔内外面〕⇒葉〔内外面〕

ここでしばらく乾燥させる。

⑤ 胴部の作出：内面に手をいれ、外面から板で叩きながら胴部を膨らませる。

【道具】叩き板〔外面〕、手〔内面〕⇒当て具〔内面〕

⑥ 頸部の作出：内面を手で支え、外面にへらを当てながら頸部を作る。

【道具】頸部用竹製へら〔外面〕、手〔内面〕

⑦ 胴部の拡張および施文：内面に当て具をあて、外面を板で叩いて胴部をさらに拡張し、施文を施す。

【道具】叩き板〔外面〕、当て具〔内面〕

さらに、頸部作出用のへらの側面で胴上部に2重の沈線を施したのち、再度しばらく乾燥させる。

⑧ 底部の作出：内面に当て具をあて、外面を板で叩いて底部を塞ぐ。はじめは底部側から当て具を入れ、底部がある程度塞がってきたら、口縁側から当て具を差し込み、底部が完全に塞がるまで作業を継続する。

【道具】叩き板〔外面〕、当て具〔内面〕

⑨ 底部の施文：内面に当て具をあて、文様が施された板で叩いて施文する。

【道具】叩き板〔外面〕、当て具〔内面〕

乾燥後に野焼きによる焼成を行い、完成となる。

これまでにドムナック・チョンボック村の土器づくりに関して言及された論考には、Rolland（1950）、Mourer（1968, 1986）、Delvert（1994）、古城および丸井（2000）、Chap Sopheara および Chay Visoth（2008）、徳澤および平野（2010）が挙げられる。いずれの報告においても、「円筒形状の原形を作成→口縁部の成形・乾燥→胴部・頸部の成形・乾燥→胴部の拡張および施文→

①粘土の準備 →

②円筒形原形の製作(1) → ③円筒形原形の製作(2)

④口縁部の作出 → ⑤胴部の作出 → ⑥頸部の作出

※⑤⑥の順序は入れ替わる場合もある。

⑦胴部の拡張・施文 → ⑧底部の作出 → ⑨底部の施文　乾燥・焼成・完成

※⑦より大型の器種の写真を使用（製作技法は共通するが小型のチュナンの製作では⑧は座った状態で行う。）

図２：ドムナック・チョンボック村のチュナン製作工程

底部の成形および施文」という基本的な製作工程は共通しているが、細部においては一部差異や今回の調査では確認されなかった特徴も報告されている。例えば、Rolland の報告では、底部の文様が欠けているものや、従来とは異なる文様が施された事例が見られる。また、当時の土器文様と刺青文様の類似性についても指摘されている（Rolland 1950: 310–312）。一方、徳澤および平野の報告では、チュナンの内面に磨きが施されていると述べられているが（徳澤・平野 2010: 41）、今回の調査ではそのような工程や痕跡は確認できていない。また、当て具についても複数の種類が存在し、各工程に応じた名称に基づいて使い分けがなされていることが報告されている（徳澤・平野 2010: 45–51）。さらに、製作者によっては、ひとつの製作道具を複数の工程で併用したり、反対に叩き道具の両面で異なる機能をもたせたりする事例も見られたが、基本的に製作道具の数や種類のわずかな違いは製作者個人に依拠するものであると考えられ、時代の経過に伴う技術的な大きな変化は確認できなかった。

4．製作技法と工具痕跡

現在までに東南アジアで確認されている最古の土器は、ベトナムのダブート貝塚で出土した土器であり、前4000年頃の年代が想定されている。これはホアビノ・バクソニアン後期段階であり、新石器時代に相当する（今村 1984、坂井ほか 1998）。カンボジアにおいても、先史時代から多くの土器が確認されており、ラン・スピアン洞窟遺跡やサムロン・セン貝塚、環濠集落遺跡などの出土遺物の調査が進んでいる（Mourer 1970・1986、Ly 2002、Groslier 1966）。また、鉄器時代からプレ・アンコール時代にかけて外来の回転台技術の導入が土器に残る回転痕跡からも見てとれるようになり、アンコール時代以降になると遠心力を用いた轆轤成形による製陶技術も加わるほか、窯で焼成されるクメール陶器が出現する（Stark 2001・2019、Bong 2003、田畑 2008、横山 2021）。一方、伝統的な叩きづくりによる製作技術は先史時代から現在に至るまでカンボジアをはじめとする東南アジアの国々で継続しており、轆轤など新しい技術に押されつつも、確固たる地位を維持してきた。今日日本ではなかなか目にすることができない叩きづくりの製作技法もカンボジアでは実見することが可能であり、民族事例の観察を通して、古代の土器の製作技法や動作、工具の同定に繋がる有用な知見を得られると考えた。以下では、ドムナック・チョンボック村におけるチュナンの製作工程に沿って、工具とその痕跡に着目し、製作時の動作と技法について検討していきたい。

製作工程③（「原形」製作）で用いる工具：トロネアッ・レアッ（ទ្រនះរះ）
椰子の茎（ティエン＝「枝」、ドーン＝「椰子」）の部分を使用して製作された叩き板である。トロネアッ＝「叩く道具」、レアッ＝「叩く」の意味である。内面を手で支えながら下方から上方に少しずつ伸ばしながら叩く。工具表面は椰子の筋があるため、土器外面にも叩いた向きに沿う

筋の痕跡がはっきりと残る。また、内面は手で押さえるため、指または手側面の歪なぼこぼことした凹凸が回転数に応じて複数段形成される。

トロネアッ・レアッ

図３：製作工程③（「原形」製作）で用いる工具

製作工程④（口縁部の作出）で用いる工具：スラッ・チュルオイ（ស្លឹកជ្រូយ）
スラッ＝「葉」、チュルオイ＝「葉の一種類」の意で、この葉はグアバの葉でも代用可能とのこと。円筒縁に水で湿らせた葉を乗せ、指で内外から力を加えながら、反時計回りに製作者が回転して口縁部を作出する。口縁内外に横向きの滑らかで細かい「なで」痕跡が形成される。ただし、「指なで」または「布を用いたなで」の痕跡との差異はあまりはっきりしない。

スラッ・チュルオイ

図４：製作工程④（口縁部の作出）で用いる工具

製作工程⑤（胴部の作出）で用いる工具：トロネアッ・ボンパウン（ទ្រនះបំប៉ោង）およびクル（គីល）a
トロネアッ＝「叩く道具」、ボンパウン＝「膨らむ」の意で、胴部成形に用いる叩き板である。この工程では胴部を外側に広げ、膨らませる作業が行われる。また、内部に小さいクルを当てて支える[4]。トロネアッ・ボンパウンは刻みなどが施されない平らな板だが、長年使用することで、クルによる丸い窪みが形成されていることもある。土器の胴部は外側に膨らみ、前段階のトロネアッ・レアッによる痕跡が少し滑らかになるものの、筋は目視できる程度には残る。内面はクルで押さえるため、均一な大きさの丸い窪みが回転数に応じて複数段形成される。

トロネアッ・ボンパウン+クルa

図５：製作工程⑤（胴部の作出）で用いる工具

製作工程⑥（頸部の作出）で用いる工具：トロネアッ・カイッ・コー（ទ្រនះកាច់ក）
トロネアッ＝「叩く道具」、カイッ＝「折る、曲げる」、コー＝「首」の意で、頸部作出に用いる竹製のへらである。先端を細く薄いへら状に加工しており、竹の滑らかな表面を土器に沿わせて頸部の窪みを作る（工具の内面には竹の節が見られる。）工具を水につけてから成形することもあり、土器表面は葉脈のあるスラッ・チュルオイよりもさらに細かい滑らかな「横なで」痕跡が残る。内面は手を差し込んでトロネアッ・カイッ・コーにあわせて横に滑らせており、指による「横なで」痕跡が形成される。

トロネアッ・カイッ・コー

図６：製作工程⑥（頸部の作出）で用いる工具

製作工程⑦（胴部の拡張および施文）で用いる工具：トロネアッ・バウク（ទ្រនះប៉ើក）＋クルａ
トロネアッ＝「叩く道具」、バウク＝「開く、開ける」の意で、胴部の拡張および施文に用いる叩き板である。また、内部に小さいクルを当てて支える。トロネアッ・バウクにはわずかに傾く斜線の刻みが施され、中心にはそれらを貫く直行する一筋の太い線が刻まれる。また、トロネアッ・ボンパウンの裏面にトロネアッ・バウクの機能を持たせる場合もある。施文では短軸方向に工具を動かし施文するため、土器外面には縦方向の斜めの浮線文が形成され、それらを貫くかたちで土器に並行する太い横向きの浮線文が回転数分段として表現される。また、内面はクルで押さえるため、胴部成形時の痕跡の上に、同様の均一な大きさの丸い窪みが回転数に応じて複数段残る。

トロネアッ・バウク+クルa

図７：製作工程⑦（胴部の拡張・施文）で用いる工具

製作工程⑧（底部の作出）で用いる工具：トロネアッ・バット（ប្រនះបិទ）およびクルｂ

トロネアッ＝「叩く道具」、バット＝「閉める、締める」の意で、底部成形に用いる叩き板である。この工程では底部の粘土を外側から内側に伸ばして、閉じる作業が行われる。また、内部に大きいクルを当てて支える。トロネアッ・バットも刻みなどが施されない平らな板だが、トロネアッ・ボンパウン同様長年使用することで、クルによる丸い窪みが形成されていることがある。また、木の劣化により自然に木目に沿ったひびが入ることもある。土器の底部の穴は塞がり、トロネアッ・バットによる中心に向かう四角い痕跡が多数残る。また、内面はクルで押さえるため、均一な大きさの丸い窪みがこちらも中心に向かって形成される。

トロネアッ・バット+クルb

図８：製作工程⑧（底部の作出）で用いる工具

製作工程⑨（底部の施文）で用いる工具：トロネアッ・プロン（ប្រនះកាត់）およびクルｂ

トロネアッ＝「叩く道具」、プロン＝「埋める」の意で、底部施文に用いる叩き板であり、短軸方向に直線の刻みが施される。また、内部に大きいクルを当てて支える。トロネアッ・バウクの裏面にトロネアッ・バットの機能を持たせる場合もある。長軸方向に工具を動かし胴部から底部に向けて施文するため、土器外面には縦方向の直線的な浮線文が底部中心に向かって放射状に表現される。また、内面はクルで押さえるため、底部成形時の痕跡の上に、同様の均一な大きさの丸い窪みが中心に向かって複数残る。

トロネアッ・プロン+クルb

図９：製作工程⑨（底部の作出）で用いる工具

以上がチュナン製作時の各過程における使用工具と痕跡であるが、作業工程が進むごとに前の痕跡の上に次の痕跡が上書きされていくのが常である。考古遺物としての土器の場合、多くは墓地や都市など消費地遺跡から出土することが多く、完成品が主体となる。そのため、土器に残る痕跡も完成時のものであり、製作技法を検討する際には、全体の工程のうち最後に残る痕跡が何であるか考える必要がある。ドムナック・チョンボック村のチュナンの場合、完成時に残る痕跡は以下の通りである。

表１：製作工程と最終段階での痕跡の有無

工程	外面痕跡	残存	内面痕跡	残存
③　原形製作	トロネアッ・レアッ	×	手	×
④　口縁部作出	スラッ・チュルオイ	○	スラッ・チュルオイ	○
⑤　胴部作出	トロネアッ・ボンパウン	×	クルａ	×
⑥　頸部作出	トロネアッ・カイッ・コー	○	手	○
⑦　胴部拡張・施文	トロネアッ・バウク	○	クルａ	○
⑧　底部作出	トロネアッ・バット	×	クルｂ	×
⑨　底部施文	トロネアッ・プロン	○	クルｂ	○

つまり、外面には、口縁部にスラッ・チュルオイによる横なで痕跡、頸部にはトロネアッ・カイッ・コーによる横なで痕跡、胴部にトロネアッ・バウクによる施文、底部にトロネアッ・プロンによる施文が残る。また、内面には、口縁部にスラッ・チュルオイによる横なで痕跡、頸部に指による横なで痕跡、胴部にクルａによる窪み、底部にはクルｂによる窪みが見られる。このように製作工程・順序によって痕跡のパターンが決まる。遺物の観察を行う際には、痕跡の単位を読み取り、製作工程・順序の前後関係を検討することで、当時の製作技術を具体的に明らかにすることができる。

5．考古資料への応用

先述の通り、先行研究では製作工具や痕跡など資料自体の観察を通じた技術的側面に対する研究が不十分であり、実際の考古遺物との比較・検討にまで行きついていないという課題がある。そのため本章では、遺跡における出土遺物に残る技術的痕跡と民族事例における製作技法を比較することで、カンボジアにおける考古資料の解釈への援用の可能性を提示したい。

(1) アンコール・ボレイ遺跡出土広口短頸丸底壺とカンポット州のチュナン

【考古資料】

同資料はアンコール・ボレイ遺跡おける典型的な壺であり、オレンジ色のスリップがかけられることからアンコール・ボレイ遺跡のフェーズⅡ（BC200～AD300）の鉄器時代に比定されてい

【遺跡出土遺物】

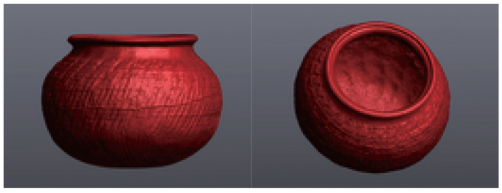
広口短頸丸底壺（縄蓆文）

広口短頸丸底壺（縄蓆文磨研高台付）

広口短頸丸底壺と当て具

【民族資料】

チュナン（痕跡）



製作道具（当て具+叩き板）

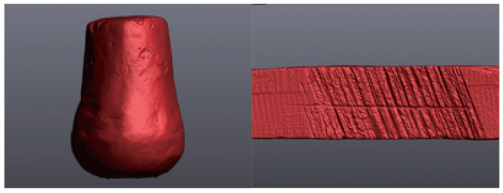


図10：壺に残る痕跡と技術

る。内面には凹凸が見られ、外面下部には縄蓆文の痕跡が残る。また、フェーズⅡでは16点の当て具も出土しており、叩きづくりであると想定される[5]。

【民族資料】

カンポット州のチュナンは、叩き板と当て具をもちいた叩き技法で製作される。ヤシの枝を用いた叩き道具が使用される点は、地理的特色を反映した東南アジアならではの特徴といえる。また、完成品では内面には当て具の痕跡が残り、外面は叩き板による痕跡が確認できる。また、叩き板には刻文が施されたものを使用しており、装飾として意図的に叩く工程が見られる。

⇒考古資料および民族資料では、内面に同様の丸い円を連続したような痕跡が見られた。また、外面は考古資料では縄蓆文、民族資料では刻みを施した叩き板による浮線模様という違いがあるが、古代の叩き板に紐などを巻いていたと想定するとほぼ同様の動きによる形跡であるといえる。また、考古遺物の縄蓆文の上部はケズリにより消される一方、胴部から下部にかけては明瞭に残存している。民俗事例においても装飾として意図的に文様が施されることから、同様の目的があったと推測される。

(2) アンコール・ボレイ遺跡出土円盤形状蓋とカンポット州の蓋

【考古資料】

アンコール・ボレイ遺跡おける典型的な蓋であり、同資料もオレンジ色のスリップがかけられる資料が存在することからアンコール・ボレイ遺跡のフェーズⅡ（BC200～AD300）の鉄器時代に比定される。また、同様の資料はベトナムのオケオ文化の遺跡でも多数確認されている。内面には明瞭な回転痕跡が残るほか、外面上部にはヨコナデ、底部にはヘラケズリの調整が見られる。

【民族資料】

カンポット州の蓋は、叩き板と手、葉をもちいて製作される。はじめに円柱形の塊を作成し、上面から指を入れながら窪みを作る。窪みを徐々に大きくし、外面を板で叩きながら逆三角形の蓋を製作していく。その後、葉を用いて自身が回転しながら薄く広げていき、形を整える。最後には糸を用いて切り離し、一定期間乾燥させたのち、持ち手になるつまみ部分を追加する。

⇒考古資料においては、この時期以降回転痕跡の見られる資料が増えることから、外部との接触により回転台技術が導入されたと考えられてきた。しかし、民族事例の場合のように、自身が回転することで回転痕跡が生じる場合も見受けられる。考古資料に残る身体動作や道具による痕跡や胎土・粒子の動きによる判断には限界もあるが、民族事例との比較や実験考古学的手法を用い

【遺跡出土遺物】

円盤形状蓋

【民族資料】

蓋（痕跡）

【民族資料】　製作技法

図11：蓋に残る痕跡と技術

た検証が今後求められる。

(3) アンコール・ボレイ遺跡出土磨研土器とプレイ・ベン州の壺

【考古資料】

アンコール・ボレイ遺跡をはじめとする鉄器時代から続く遺跡では磨研土器が多く確認されてきた。磨研土器の主な器種として鉢・壺・高坏があげられる。資料によっては、クロスハッチや放射状など装飾を意図したと考えられる遺物も複数見られる。

【民族資料】

プレイ・ベン州では壺の装飾に磨き文様を取り入れている。土器を製作後一定時間乾燥させたのち、焼成前に磨きを施す。インタビュー調査を実施した結果、磨きは装飾のために施しているが、何かの形状を意識した文様ではないとのことであった。磨きの方法として、日本では一般的に石などを使う方法が考えられているが、同地域ではカタツムリやタニシの殻を用いる。

⇒民族調査により、器面調整だけではなく、装飾としての意図からも磨きが施されることを検証することができた。また、カタツムリやタニシなどの新たな道具の可能性も視野にいれるとともに、資料に残る研磨痕の幅や滑らかさなども踏まえて、今後遺物の研磨に使用した道具の特定を

【遺跡出土遺物】

磨研土器（直立口縁丸底鉢/丸底壺/内湾口縁高坏）

【民族資料】　製作技法

壷（痕跡）　　施文道具と技法

図12：磨研痕跡と技術

進める必要がある。

(4) サンボー・プレイ・クック遺跡群出土の壺口縁とコンポン・チュナン州の壺口縁

【考古資料】

サンボー・プレイ・クック遺跡群はプレ・アンコール時代「真臘」の都に比定されている重要な都市遺跡のひとつである。都市区の発掘調査における出土遺物の年代はC14年代測定の結果、5世紀前半から7世紀前半の年代が得られた（横山 2021）。同遺跡群ではクンディとよばれる注口土器をはじめとするプレ・アンコール時代に典型的な土器が多数確認され、口縁部の形態には様々なバリエーションが見られる。その中でも、よく確認される形態として段をもつ口縁があげられる。段の幅や厚みも時代によって特徴は変遷するという指摘もあり（チュン 2009）、口縁形態の変化はカンボジアにおける土器編年を構築するうえで重要な視点のひとつである。

【民族資料】

コンポン・チュナン州では壺の口縁部を製作する際に、布や葉を指と指で挟み、土器の周りを製作者が回転することで、段をもつ口縁形状を作り出している。指の当て方を変えることで、様々な形態の口縁部を形成することができることが可能であることがわかった。

【遺跡出土遺物】

壷・注口土器口縁部

【民族資料】

製作技法と痕跡

図13：口縁形態と技術

⇒複数の道具を使用せずとも身体的動作の少しの使いわけで様々な形態の口縁部を作り出せることが明らかになった。今後は遺跡出土資料の口縁部形態のパターンを抽出し、村の職人と共にどのような技法で製作したかを共に検討していくことも新しい試みとして重要であると考える。

おわりに

本稿では、カンボジアにおける考古学的な土器資料の技術的特徴を解釈するうえでの民族事例の援用の可能性について検討した。カンボジアの土器研究では未だ技術・形態的特徴に基づく詳細な検討が不足しており、遺跡間や地域間での交流関係も曖昧な状態である。しかし、文字史料や美術・建築・美術資料が乏しい先史時代から歴史時代にかけての変容と発展は、物質文化のみから明らかにすることができると考えている。今後はさらに詳細な痕跡的証拠の把握に努め、民族事例との比較や実験考古学的手法も取り入れることで、土器様相の解明に取り組んでいきたい。また、タイの研究でも注目されているように土器と稲作は密接な関係にあり、古代においても現在の民族事例においても籾殻を混和剤として胎土に混ぜる事例が見受けられる。将来的には科学的な手法による環境や社会的側面からのアプローチも踏まえ、当時の社会背景を検討していくことが必要であろう。

謝辞

本稿の執筆およびそれに伴う資料調査に際し、多くの皆様からのご協力・ご助言をいただきました。ここに芳名を記し、感謝申し上げます。

CHHUM Menghong 氏（文化芸術省）、TEP Sokha 氏（文化芸術省）、BIN Sarith 氏（カンボジアユネスコ国内委員会）、LEAK Siphanna 氏（カンボ ジアユネスコ国内委員会）、OUK Vannarith 氏（カンボジアユネスコ国内委員会）、李承叡氏（早稲田大学）

また、本研究は JSPS 科研費21K20052の助成を受けたものです。

注

（1） バッタンバンについては、小規模であるため結論での言及は避けているが、文中では触れている。

（2） カンポット州における焼成技術には、野焼きによる方法もあることが中村ほか（2010）などの調査で明らかになっており、窯を用いることが同地域の特徴として妥当かは今後改めて検討する必要がある。

（3） 民族考古学の定義では、「参与観察」の実施が提言されているが、本研究では内部と外部を明確に分け、敢えて関与しないことで、不可抗力のないデータの取得に努めた。

（4） 工具は同名のものが複数種類あるため、本稿では仮にアルファベットを用いて分類する。

（5） 叩き板は有機物である場合、大抵出土しない。

文献一覧

安斎正人（2004）『理論考古学入門』柏書房

池田榮史（2011）「カンボジアの土器作り」『琉球大学　人の行動と21世紀グローバル社会　越境するタイ・ラオス・カンボジア・琉球』彩流社

今村啓爾（1984）「東南アジアの土器」『世界陶磁全集』16南海：254-271

植野浩三（1983）「須恵器蓋杯の製作技術」『文化財学報』2：45-56

大阪大谷大学博物館（2012）『東南アジアの伝統的土器つくり―事例調査報告書―カンボジア・フィリピン・タイ・インドネシア―』

大西秀之（1998）「土器製作者の誕生：カンカナイ社会における技術の伝習と実践」『民族学研究』62(4)：470-493

大西秀之（1998）「ルソン島北部・カンカナイ社会において形作られた土器製作者の身体」『物質文化』64、pp.1-28

大西秀之（2007）「フィリピン・ルソン島山地民の土器製作技術の一考察―語りえぬものの民族誌に向けて―」

大西秀之（2014）『技術と身体の民族誌：フィリピン・ルソン島山地民社会に息づく民俗工芸』昭和堂『土器の民族考古学』同成社、pp.27-42

北川香子（2009）『アンコールワットが眠る間に　カンボジア歴史の記憶を訪ねて』連合出版

北野博司（2012）「タイ国ウボンラチャタニー県ドンチック村の土器作り」『東北芸術工科大学歴史遺産研究』No.7：22-44

黒澤浩（2016）「カンボジアにおける土器作り村の調査―コンポンチュナン州アンドゥオン・ルッサイ村の事例―」南山大学紀要『アカデミア』11：43-67

後藤明（2001）『民族考古学』情報考古学シリーズ、勉誠出版

小林正史（1996）「東南アジアの土器作り民族誌における工程間の結びつき」『立命館大学考古学論集』III-2：1043-1066

小林正史（2000）「カリンガ土器の変化プロセス」『交流の考古学』134-179

小林正史・外山政子・北野博司（2016）「ラオス・アタプー県オイ族の伝統的米作りの変容過程」『物質文化』96：71-88

坂井隆・西村正雄・新田栄治（1998）『東南アジアの考古学』同成社

清水潤三（1959）「カンボジアにおける土器作り部落とその技術」『民俗学研究』23(1-2)：54-62

清水潤三（1963）「カンボジヤにおける土器製法の一例」『考古学雑誌』49(2)：75-77（例会要旨）

庄田慎矢（2007）「土器成形と叩き板に関する民族考古学的研究」『科技考古研究』13：75-91

庄田慎矢（2010）「土器作り叩き板の考古民族植物学的研究」『文化財科学会誌』60：39-55

田畑幸嗣（2008）『クメール陶器の研究』雄山閣：東京

千葉市加曽利貝塚博物館（1975）「縄文土器の技術―その実験的研究序説―」『貝塚博物館研究資料』1

チュン・メンホン（2009）.「カンボジアにおける前アンコール時代の土器文化―特に水注土器（クンディ）」沖縄国際大学修士論文

徳澤啓一・平野裕子（2010）「カンボジア南部におけるクメール族の伝統的土器製作―ダムナック・チョンボック村における Chhnang の成形を中心として―」『カンボジアの文化復興―アンコール遺跡および伝統文化復興の研究・調査』26：37-61

徳澤啓一・平野裕子・北野博司・中村真里絵（2012）「ベトナム北部からラオス北部にかけての焼き締め陶器製作及び土器製作の展開―焼き締め陶器製作の地域差と変容を中心として―」『東南アジア考古学』32：43-56

中園聡・平川ひろみ・川宿田好見・太郎良真妃・三辻利一（2012）「北タイ伝統的土器製作村の素地作り個人内安定性―蛍光 X 線分析を用いた検討を中心として―」『国際文化学部論集』第13巻第 3 号：235-254

中村浩・池田榮史（2008）「カンボジアの土器作り―コンポン・チュナン（Kampong Chhnang）州の土器づくりについて―」『大阪大谷大学紀要』42：1-23

中村浩・池田榮史・城間宣子・飯田絢美（2010）「カンボジアにおける土器づくり―カンポット州ロン・ナ・チョンボリ村の状況を中心に―」『大阪大谷大学紀要』44：1-32

中村浩・池田榮史（2009）「カンボジアにおける伝統的土器作り―コンポン・スプ州ロン・ライ村の状況」『大阪大谷大学紀要』43：1-32

長友朋子（2020）「日本考古学における民族考古学の歩み―土器研究を中心として―」『立命館文學』668：2114-2092

楢崎彰一、H. Leedom Lefferts Jr., Louise Allison Cort（2000）「東南アジア本土における現在の土器および焼締陶の生産に関する地域調査」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』8：105-192

平川ひろみ・中園聡・川宿田好見（2016）「土器製作におけるミガキ具―北タイにおけるミガキ石の民族考古学的調査―」『日本情報考古学会講演論文集』16：94-97

横山浩一（1980）「須恵器の叩き目」『史淵』117：127-155

横山未来（2021）「カンボジア、サンボー・プレイ・クック遺跡群都市区出土土器の研究」『東南アジア考古学』40：5-20

吉田江美子（2003）「須恵器長頸瓶の製作技法 山形県内の窯跡出土資料から」『山形県埋蔵文化財センター　研究紀要』117-123

Anonymous (1899) Les Poteries de Kampong Chnang et de Prey Kri au Cambodge, Bullitin Economique de l'Indochine, 235-240

BONG, S. (2003). The Ceramic Chronology of Angkor Borei, Takeo Province, South Cambodia, PhD in anthropology dissertation, University of Hawaii

Chap Sopheara・Chay Visoth (2008) The Pottery production in the village of Damnak Chambok, Udaya

Delvert J. (1994) Le paysan cambodgien. L'harmattan: Paris.

Gloslier, B. F. (1981). Introduction to the ceramic Wares of Angkor, in Diana Stock ed. Khmer Ceramics: 9th-14th Century: 9-39. Oriental Ceramics Society: Singapore

Kojo Yasushi・Marui Masako (2000) *"Khmer Pottery Making in Chanlak Dai, Southern Cambodia"* Anthropological Science 108(1): 1-19

Ly.V. (2002). The Archaeology of ShellMatrix sites In the Central Floodplain of the Tonle Sap River, Central Cambidia (The Shell Settlement Site of Samrong Sen and Its Cultural Complexity), PhD dissertation, Sophia University

Mourer R. (1968) Note sur des procedes traditionnels defabrication de la poterie au Cambodge: le faconnage des marmites: observations sur le tour de poterier. Proceedings VIIth International congress of Anthropological and Ethnological Sciences 1968 Tokyo and Kyoto vol. III Ethnology and Archaeology. Science Coucil of Japan, Tokyo: 5-10

Mourer. (1986) La Porerie au Cambodge: Histoire et Development (Essai d'Ethno-Technologie These Pour le Soctorat D'Etat Es Lettres et Sociences Humanines.) Ecole Des Hautes Etudes en Sociences Sociales.

Souyris-Rolland A. (1950) La poterie dans le sud-Cambodge. Bulletin de la Societe des Etudes Indochinoises (Nouvelle Serie), tome25: 307-314

Stark, M. T. (2001). Some preliminary results of the 1999–2000 archaeological field investigations at Angkor Borei, Takeo Province. Udaya: Journal of Khmer Studies 2(1): 19-36.

Stark, M T. and Fehrenbach, S. (2019). Earthenware ceramic technologies of Angkor Borei, Cambodia. Udaya no.14: 109–135. Yosothor: Phnom Penh